

翻 訳

マティルデ・ハイン ドイツの農村と民俗衣装

——1930年代のヘッセン州北域の調査研究—— (2)

河 野 真 (訳・解説)

(目次)

[訳者解説 1]

序文

0. 民俗衣装の村：概観

1. 村落ゲマインシャフトにおける衣装 (途中まで) 前号 続き (以下, 本号)

(女性の衣装)

(男性の衣装)

図：男性のシャツの断ち方

2. 村の仕事着と晴れ着

(畑の仕事着)

(牧草刈りの衣装と穀類収穫時の衣装)

(パン焼き小屋)

(布地の晒し場)

図：女性のシャツの断ち方

(村有地での鷺鳥の飼育)

(週日の衣装と日曜の衣装)

(キルメス [秋祭り])

訳注

(女性の衣装)

子供の衣装は全体としては乙女の衣装を基準につくられており、重点は後者にある。その際、衣装はその類型的な形態からうかがえるように、個々人の身体的美を際立たせることに主眼があるのではない。その作用は、むしろ逆である。肝心なのは乙女が乙女として現れることであり、衣装は出来上がった理想像に資するためである。その理想像の特徴は色調の喜

ばしきで、マールドルフの人々の言い方では《沸き立つばかりの》(bruskelig = brausend) ということになる。幾重もの襷が作りだす華麗で女性らしい外観である。そうした乙女の衣装だが、それで完結しているのではない。結婚した女性になるための経過点にして準備段階である。若い女性はもちろんそれを感覚的に了解している。それゆえ目的の結婚に至るや、目もあやな色彩の喜びは終わる。マールドルフで若くして結婚した女性の言い方では、《もう誰も私たちを見てくれない》となる。乙女の衣装において色彩と共に重要なのはその豪華さである。乙女の生き方には、乙女だけがもつチャンスがある。キルメス(秋祭り)のダンス(後出i)や、乙女だけがメンバーになる信心会である(後出j)。実際、乙女である若い女性におけるほど教会着や喪服の等級がみられるものはない(後出k)。そこでは衣装は、若者のゲマインシャフトの生きた緊張の中にある。衣装は、ここでは、近隣の村々の違った着方や時代の流行を受けていることに反発するかたちをとっている(後出l)。とは言え、現実には、マールドルフの娘たちも、何が何でも《モダン》でありたいとの気持ちを秘めているのである。

娘たちの普段着の事情は、一般に女性の仕事着を問うことと重なる(後出m)。乙女の場合、ひときわ目立つのは紅い縞子のリボンである。仕事着のスカートがどんなに擦り切れても、これだけは輝きを失わない。他に、乙女たち全員に言えるのは紅色を基調とするスカーフとネックチーフである。30年前までは、乙女たちは必ず紅い《カッペ》(Kappe 真紅のリボンスカーフ Bandhaube)を被っていた。娘にとって、14歳から20歳までは、民俗衣装そのものが徐々に成長してゆく過程でもある。初聖体拝領の日の《地味な》(fahl)布地スカートでは満足できない。特に教会堂での祭礼では、燃えるようなグリーンの布地スカートを娘たちは欲しがる(後出n)。喪中や半喪中〔訳注 死去から半年以後など〕については、黒い布地スカートや、さまざまな黒あるいはダークグレーの混紡地スカートになる(後出o)。日曜の午後には、グレーや*《跳ね織り》や厚手木綿布(Wollbiber)のスカートが好まれる。どのスカートにも、それに合うリボンが付くが、高価な絹リボン(モアレ・リボン)でギザギザの縁取りがついたものもあれば、値段の張らない木綿の*《綿^{わた}リボン帯》のこともある。さらに高価なのは、幅の狭い《花リボン帯》(blümicht Baand)で、スカートの縞子の幅広のリボンに沿って付けられる(カラー図版1)。乙女の時期には、先に挙げた(潑刺とした紅・緑・青あるいは菫青の)《磨き上着》(Plüschmotzen)の上に、さらに数枚の《サテンの上着》を重ねる(カラー図版1)。正規農民の娘は、こうした高価な着物を毎年手に入れることもある。他方、女中は、そうした品に少しでも近づくように節約を重ねる。しかしどちらにとっても嬉しいのは、母親や《代母》(Sell)あるいは伯母からそうした憧れの品をもらうことである。娘たちは、誰が《もう全部揃えている》かを互いに知っている。祭日のミサの間、人々は新しい衣装を目にするや、それを吟味し、教会堂からの帰途には、どんな小さな癖についても(たと

えばスカートの本のリボンの色の調和), 《全然なっていない》などと評する。

《縫いもの》, すなわちスカーフ, モツツェ (上着), 菱文ストッキング, 《飾り》下着 (“buntes” Hemd) は, 娘たちが特に誇りにする衣装である。それらは, カトリック教会系の民俗衣装のなかでも, 高度な手わざの証しとなる手仕事の所産である。それをつくるために, 娘たちは空いている時間のすべて, 特に永い冬の夕べを費やす。既婚の女性がそうした手仕事に加わることはめったにない。彼女たちは, すでに一生分を蓄えているからである。15歳になると, 先ずキルメス用の下着をつくる。さらに16歳になってキルメスのダンスに行きたくなると《飾り》下着へ進む。この白い編み物は昔はヘッセンの民俗衣装ならどれにもほどこされるほど一般的であったが, 今日ではシュヴァルム地方〔訳注〕マールドルフの北東に広がるプロテスタント教会圏で民俗衣装が残ったことで有名)に見られる程度で, またその工藝的な価値の代名詞になっている。マールドルフの娘たちは, この技術を村に拠点をもうけた*慈悲の修道女会のシスターたちが開いた《裁縫学校》で習得する。手仕事に堪能などんな民俗衣装をも手掛け, それが裁縫学校の伝統になっている。この《縫いもの》ネッカチーフは, 乙女たちの手になる最も重要な手仕事と言ってよい (カラー図版4〔訳注〕手前右の女性の正面と左奥の女性の背面)。編み物は幅広い40cm程の背中の中三角形に始まる。肩と胸にあたる場所は幅20cm程で, 先端は尖りになる。また背中を起点にもう一条おなじ長さの帯が編まれる。それゆえ布の長さは併せて2.5-3mになる。昔は, 白い羊毛を自分で紡ぎ, 編み上げると染色をおこなっていた。今日では, めったにそこまではしない。染色した羊毛をすぐに買うことができるからである。なお色調として娘たちが好むのは紅と董青であるが, 用途に応じて, 黒や緑や茶の生地が必要になることもある。なおこの生地は, 右編みと左編みの格子縞が合わせられている。外縁と両端は同じ色合いのウールの刺繍でまとめられている。ちなみに最新のモードでは, この鉤編み刺繍が火炎文様の縁辺部に再現され, しかもそこで使われる糸の色は刺繍の花文様に溶け込んでいる。また刺繍文様, すなわち《冠》(Kraanz)が, ウールの色系による十字刺繍をあしらった狭い縁取りに至るまで素地を埋め尽くしている。娘たちは平縫刺繍では, 時にはいわゆる《長縫い》をほどこすこともある。いずれの場合も, 同じモチーフの繰り返しが花輪状になる。明るい紅や白の薔薇と蕾と緑の葉の文様とならんで, パンジーの花輪, さらに百合あるいはスズランに薔薇の組み合わせ, 葡萄の房に葉と蔓, オークとその葉, 花々の間に麦穂といったものが特に好まれる紋様である。娘たちは, 特に見本のスケッチや刺繍図集を使ったりしない。おそらくカトリック信徒向けの家庭雑誌, *『神の町』や*『モーニカ』等で目にできる祭具意匠一式と関連した刺繍デザインが絶えず新たな刺激になっているのであろう。またすでに出来た刺繍のスカーフを写すこともできる。花輪紋様は母親あるいは代母の持ち物として目にしていることもあり得, またその場合, 色合いやモチーフの組み合わせは変化することもある。しかし娘たちのあいだで最も

好まれるのは《新しい》デザインである。そうしたデザインの場合、地域の境界を越えて、作業の手ほどきは一日置かれる。マールドルフには、そうした評判を得ている娘たちもいる。中には、刺繍を売る小間物業の女性のことも。かくして、デザインの交流は盛んである。娘たちは、自分のデザインを他人に提供するのをけちったりしない。《冠、もう持つてる？》、と互いに尋ね合う。真似たデザインの布地も、下地の色が変わると見本とは一味違った趣になる。そうした牽引役の女性の作品を見ると、その技量に納得させられる。彼女たちはたいてい手本もなく刺してゆく。またパンジーやバラを微妙な色合いと確かな輪郭で表すこともできる。そうした刺繍を前にすると、手さばきの永い伝統を感じるのは無理がない。しかしマールドルフの民衆色ゆたかな手藝は意外に新しい。試みに、母親や祖母たちのネッカチーフが紋切り型の刺繍であるのに較べると、直近40年間の進歩には目を見張るものがある。衣装伝統の一つでもある祖母たちの時代（つまり1860年頃）のネッカチーフはフルダ地方〔訳注〕中心のフルダはヘッセン州北東域の中核都市で司教座所在地）から学んだものだった（後出p）。事実、マールドルフの老婦人たちは、今でも《フルダのショール》(Fulder Halstücher) という言い方をする。これらはフルダ地方では《心を温めるもの》(Seelenwärmer 毛糸のセーター、チョッキ、ショールへの愛称) と呼ばれ、すでにこの呼び方が、同じ名前の*シュリッツ地方のウールのショール(写真52)と元は親近であったことを示している。シュリッツ地方のそれは、《フルダの布》の簡単なウール房を厚いウールの塊へと発展させたのである(後出q)。マールドルフの19世紀のショールは、まだそうしたウール房で、またショールの端をウェストの背中の襷寄せでまとめる真鍮の留め金もついていた。次いで、ネッカチーフの両端を留めずに垂らすという展開になり、今日でも背中であなびかせており、また50cmを超える長い華やかな布がスカートにまでかかっている。《長い(のを持つ)人は長く垂らし、もっと長い(のを持つ)人はもっと長く垂らす》とは、マールドルフの女性たちがショールについて口にする言い回しで、またショールに現れた社会的な差異をも指している。今日では、ネッカチーフはモツツェの下に着けるため、両端以外は、胸部の隙間から少し見えるだけである。両端の作りや、ネッカチーフ全体に高価な刺繍がほどこされることから推すと、以前は胴着(Mieder)の上に着けていたらしい。事実、1880年頃の写真では、当時、マールドルフの女性たちは、ネッカチーフをモツツェの上で結わえている。この刺繍のネッカチーフと並んで、それより幾らか早くフルダ地方から入っていたのが鉤針編みのネッカチーフである。マールドルフでは今日でもそれが作られている。鉤針編みの花文様が入るが、あまり立体感はなく、色彩も鮮やかではない。花文様をほどこさず、広い縁をジグザグ文様にとどめていることも多い。それは《ナイフの先》と呼ばれ、同じ色合いのまま僅かな陰影を繰り返すのである。この鉤針編みのネッカチーフには、少女たちはあまり満足していない。

フルダ地方からは、1880年頃に、いわゆる《縫い付けモツツェ》、すなわち（スカート幅広い）裾の縫い付け部も入って来た（写真4）。この新来は、当初、完成品としてマールドルフへやってきた。そして自前の製作を刺激した。ヤッケのメカニクな刺繍は保持されたが、前側の縁や、首周りの切れ目や、ウエストの縁飾りや、袖口には十字文様を連ねる縁取りがほどこされた。大半は、バラの輪文様で、葡萄蔓その他は稀である。先に娘たちのあいだでデザインの交換がなされることにふれたが、この場合も同じである。また娘たちの王国とも言うべき*菱形紋様を入れた靴下でも事情は似ている。白い羊毛の普段の靴下は刺繍でも菱形文様ではなく、決まり通りの青がかった董色であるのに対して、上等の菱形文様には、すでに染めが済んだ糸を都会から購入する。色合いはライトブルー・董ブルー・黒である。《昔風の》菱形はハート型の美しいデザインであるのに対して、現代風のは飛び々の線状に、脚の伸びに沿ってほとんどつま先まで走っている（カラー図版1）。靴下の膝の部分を編んだ後、開口部を縫い合わせる。このソックスは糸玉を組み入れており、そこから菱形のための糸をとる。つまりメッシュに編んでゆき、メッシュの数か所にカラーのウール糸を加えて菱形にする。それによって両面にシンメトリーの模様ができる。この編み方と刺繍の入れ方を、娘たちは、すでに義務教育の年齢のうちに、母親あるいは独身の叔母から学ぶ（後出r）。友達と同じデザインで同じように仕事を始め、時には自分の家で、時には友達の家、という具合である。隣近所の女性たちの間でも頻繁に行き来をする。そうした手藝が若い娘にとって欠かせないのは、今も《紡ぎ部屋》（Spinnstobb [訳注] Spinnstubeに同じ）へ通うからでもある。（第一次）大戦前、マールドルフでは《紡ぎ部屋》は冬場の慣習と決まっていた。隣近所や《ともだち》の家が順番で場所になる。夜になると、若い娘たちは紡ぎ車を携えてあつまり、羊毛を紡ぐ。夜も9時を過ぎると、《狩り》（Jaad）が始まる。つまり、若い男たちがやって来るのである。青年たちは青いジャケットで顔を隠して、笑い声を挙げてふざけながら娘たちを狩り、家中、さらに納屋まで、時には屋敷の庭や小路まで追いかける。年寄たちは、彼女たちの若い時のこの楽しいひと時のことをよく話題にし、また若い男女が今も《紡ぎ部屋》へ出かけるのを嬉しそうに見ている。たしかに変わってしまったものもある。自分の紡ぎ車を抱えて行く娘は少なくなり、ほとんどは自分が手掛けた刺繍あるいは編んだ靴下を持ってやってくる。窓の下の方たちに聞こえるように、愉快なお喋りや朗らかな歌声を上げる。夜が更けると、親しい青年たちはコーヒーにやって来る。アコーディオンが奏でられてダンスになる。《紡ぎ部屋》では仕事ははかどらない。

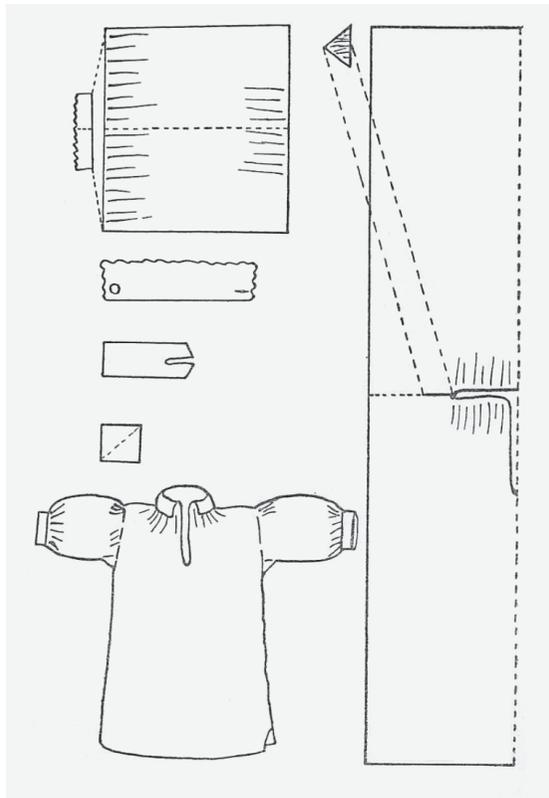
《紡ぎ部屋》は若い男女のもので、結婚した者には合わない。それは着る物にもはっきり表れる。女性の普段着（後出s）のスカートには明るい紅の縁取りは見られなくなる。たしかにこの色彩は、結婚式の日直後から消えるわけではない。が、最初の子供の誕生あたりから、あるいは夫婦の《どちらかの実家》での不幸のために黒い装いが義務となるころから

変わってゆく。そしてグリーンあるいはブルーがスカートの縁取りの色になる。この紅と緑あるいは青という二種類の意味の違いは、今日では必ずしも定かではない。しかしシュヴァルム地方では、この古くからの色彩の規則はなお生きている。紅は若い娘、緑は既婚女性で中年まで、青はさらに年齢が進んだ女性という決まりである。マールドルフの年配の女性たちは、この色彩規範は彼女らの祖母たちでは（1820年頃）頭巾もそうだったことを覚えている。もっとも、女性たちの普段着の中には、若い娘の頃の鮮やかな色調が持ち続けられるものもある。たとえば《跳ね織りのスカート》だが、それでもそうした色彩豊かなもので教会堂へ行くことはできない。若い（既婚）女性でも、明るい色地のスカート、《跳ね織り》仕立て、あるいはライトブルーの厚手木綿布のスカートですら教会堂にはそぐわないとされている。残るのは、ダークグリーンの木綿のスカートに青あるいは緑の縁取り、それともダークグレーの混紡にライトグレーの縁取り、そのどちらかの選択である。モツェ、前掛け、スカーフの場合は、紅色のものは除かれる。昔の彩り豊かで紅の刺繍のスカーフも同様である。既婚女性の場合は、菱形文様の靴下も、ブルーと白、もしくは白と黒である。こうした抑えた色調愛好も、喪中や半喪中（[訳注] 経年推移などによる差異）の厳しい決まりによって中断され、何年も黒を強いられる（後出t）。女性が年をとるにつれて、服喪にかかわる人数も増えるためその年数は長くなる。かくして華やかな色彩をたのしむのは断念する他なく、黒や灰色のスカートが着続けられる。わずかに教会堂へ参列するときのスカートの裾と、モツェや前掛けの模様付けに、明るいグリーンが輝くくらいである。

（男性の衣装）

昔は、女性の衣装がこういう段階を呈していたのと同じく、男性の衣装でもそれが生きており、やはり年齢の（喪中などの）状況と並行していた。しかし今日では、男性衣装のそうした段階はもはやみとめられない。すでにユストゥスの時代でも、《老いた農夫の半ズボン・白い上っ張り・フェルト地の帽子あるいは日曜の三帆柱（三つの角ある帽子 Dreimaster）は父祖の装いの名残として一見の価値がある》ものとなっていた。マールドルフでは今日なお、男性の衣装には昔の面影が散見されるが、さすがに共同体的な意味合いはこもっていない。男性が教会堂へ参集する装いがまだ特別のものであった19世紀の最後の二三十年でも、その点はすでに今日と変わらなくなっていた。マールドルフの老人たちは、彼らが子供の頃に、すなわち1880年頃に、教会堂へ行くときの衣装をまもっていた二人の老人がいたことを懐かしそうに語ってくれる。祭りの日や葬儀には、その二人は、短い膝までの半ズボンを履き、長い黒い木綿地のスーツを着ていた。スーツは、前開きで、身体にぴったり合うチョッキの二列のボタンを見せていた。頭には、角の一つを折り返した三帆柱帽を被っていた。足には、ぴかぴかに磨いた幅広の留め金のつく半長の《バックル靴》（Rinkeschuh）が輝いてい

た。その二人が亡くなると共に、マールドルフでは、教会堂行きの正装は消滅した。その服装は、男たちが青年に近づく初聖体拝領の日から身に着けるものであったと考えてよいだろう。それは今もシュヴァルム地方の堅信礼の習わしであり、マールドルフでも同様であったことはユスティが描きとめている。独身の男性から所帯を持つようになる変化は、結婚式の衣装において明らかになる。1850年より前には、花婿は教会堂での結婚に際しての仕来りとして、洗礼以来の代父の手で、長い黒いマントをかけてもらった。花婿は、以後、近親者の葬儀にはそのマントをまとった(後出u)。ヘッセン地方全体でも特にこの一帯では、1830年頃には同様の慣行として《花婿のマント》(Bräumantel)がなお生きていた¹¹⁾。また結婚した男性は、我が子の一人が死ぬと、三帆柱帽の縞子のリボンをはずし、それ以後つけることはない。



男性のシャツの断ち方

11) Wilhelm KOLBE, *Hessische Volkssitten und Gebräuche im Lichte der heidnischen Vorzeit*. Marburg 1888.

男性衣装の晴れ着は、マールドルフで語られる限り、他には未婚者と既婚者で大きな違いはない。19世紀末には、少年も若者も年配の人々も、日曜のミサに参集するときには《畝織りモツツェ》を着用するのが一般的であった。短いジャケットで、黒・緑あるいは赤茶色の畝織りに色とりどりの小さな花柄が織り込まれている。富裕な農民男性は晴れの日には、花柄を散らしたライトブルーあるいはライトグリーンの《縞子のモツツェ》という出で立ちであった。またそれには都会風のズボンが合っていた。どちらのモツツェの素材も、当時の女性の衣装と同じであった。男女とも、ジャケットの縁取りには白い《球》(Baicht), すなわち羊毛の詰め物が輝いていた。教会堂へ行くときのそうした男女装いには部分的ではあれ重なりが見られ、共同体的なまとまりのある村落像になっていた。

マールドルフの農民たちは、今日なお、身頃と一体で裁断した襟地を透かし仕立てにして、そこに彩り(すなわち刺繍)を入れるのをたいそう好む。同様の刺繍は肩部にもほどこされる。胸スリットの下のところには、名前のイニシャルの間に紅い刺繍でハート型あるいは小さな生命の樹が入る。シャツの襟の下に来るネックチーフは黒い絹でつくられ、前側で結わえられる。(第一次)大戦の前までは、マールドルフの少年たちが普段の日に学校へ通うときには、ブルーの亜麻地のの上っ張りが見られたものである。その同じ上着で、若者たちは徴兵検査のためにキルヒハイネへ出向き、年配の農民たちは町へ買い物に出かけた。その断ち方は、男性のシャツと同じ(参照, p. 155), さらに肩・首回りと袖の絞り方でも同じである¹²⁾。首周りには、小さな三角形の布片がジグザグ状に貼り付けられる。畑仕事や、週日の教会堂詣では、マールドルフの男性たちのあいだでは今もブルーの上っ張りが見受けられる。都会風仕立てのジャケットの上にそれを羽織るのである(カラー図版2)。

男性の衣装はかつてはヘッセン全域を通じて一様であったところから、今日なお名残をとどめているシュヴァルムの男性衣装が、昔は一般的におこなわれていた形態と見てよいだろう。この数十年間に著しく衰微したにも拘わらず(ヘルム 22v. H.), シュヴァルムの衣装には成人男性と若者の間でなお差異がみとめられる。女性の衣装と同じく、紅は若者の色、緑と青は既婚者の色である。黒い亜麻の上着の肩や首周りの豊かな羊毛地の刺繍にそれを見ることが出来る。その黒の上着に、シュヴァルムの男たちは、週日にも日曜にも程度の差はあれ贅沢な飾りつけをするのである。今も村の祭日、殊にキルメスにおいて、青年たちの装いは最も顕著である(写真49)。ぴったりした白の革ズボンは側面のボタンで留め、長い乗馬靴へ延びてゆく。短いブルーのジャケットには二列にボタンが輝いている。内側は紅いチョッキである。頭には獺革の帽子、その緑の裏地には金色の結び紐が張り渡されている。ヘッセ

12) Rudolf HELM, *Schnittzeichnungen hessischer Trachten*. In: Hessische Blätter für Volkskunde, XXVII. (1928).

ンの他の民俗衣装の地域ではすでに消滅した男性衣装でも、昔は独特の若者装束がかたちづくられていたと考えて差し支えないだろう。

2. 村の仕事着と晴れ着

農民の恒常性は、土との結びつきに根差している。この倫理的造形力は農地の所有者の故ではなく、地面との止むことなき格闘、すなわち辛い農作業に由来する。そこから社会集団は、各人の恣意を脱した紐帯を獲得する。マールドルフは、その慣行と生き方の保守的性格を、この農民存在に負っている。ここでは畑仕事は、(村の他の住民が無関心な傍観者となるような)人数が限られた集団の営為ではない。マールドルフでは、たとえば牧草の収穫には、誰もがそれに参加する。またオーム盆地が洪水に見舞われると、誰もが晴れることを願ったり、あるいは自分の収穫の心配をする。オーム盆地の牧草地での牧草の搬入では、大農家の牛二頭の荷車が現れる。傍らには牛飼いの農民が付いている。日雇いが使う手押し車もある。1926年の耕地整理の前には、耕地の窮屈さは深刻であった。刈り取りにあたっては、刈り手は男も女も、決まった距離をとって一斉に作業にいそしんだ。今日では三圃性農法が、(幾らか幅があるとは言え)同じような仕方で耕地分割と畑仕事それぞれに村の住民のまとまった暮らしを決定づけている。

(畑の仕事着)

春先、鋤耕と施肥が始まると、それは主に男の仕事である。女性は、村の近くの小さな菜園に鋤を入れて、夏野菜の種を蒔く。この畑仕事の始まりにとって重要な日取りは*聖ゲルトルートの日(3月17日)で、《ゲルトラウトを目印に根物・葉物の種を蒔く》という言い方通りである。《外へ出る》季節であるが、ほとんどの女性たちは、冬場に自分で仕上げた新しい衣装を身に着ける。たいてい、青い捺染地のモツツェで、首のスリットの《縁飾り》は《自慢》になる。それと言うのも、襷の上端は花輪文様に仕上げられて色絹糸で菱形地に留めるといふ凝ったものだからである。あるいは新しい《葦毛の馬》(Schimmel)だが、これは、村の織り手による黒い安価なウール糸と白い木綿の経糸の生地のスカートを指し、長持ちし、したがって畑仕事にはぴったりである(カラー図版2)。新しい仕事着が用意できない場合は、せめてものことに《葦毛の馬》に新しいリボンを縁飾りに付ける。農民の畑仕事の開始は、ある種の内面的高揚に裏打ちされて実現する。農民女性が新しい作業着を着るのは常と同じではなく、年間の他の日々よりもはるかに意識的である。それは衣装が新しいとか鮮やかという意味ではない。これからの一年の収穫に向かう仕事始めの意義の大きさが、質素な衣類を高貴にするのである。もっとも、作業の間は、一番上の上等のスカートは畔に掛け

ておき、青い捺染の前掛けもダークグレーの亜麻布地のものに掛け替える。しかし、着古した下のスカート、すなわち既婚女性のグレーの混紡や未婚の若い女性の昔ながらの《跳ね織り》のスカートにも、決まった縞子のリボンがついている。なお前掛けで隠れる《くさび連なり》(Gem) と呼ばれるスカートの上部、すなわち《長平》は布地を少なくするためであることがめずらしくない。1900年以前の世代では、普段着や日曜のスカートのそうした布地の節約は自明であった。今日では、その習慣もなくなりつつある。節約のためにスカートの襞の布地を減らすこともない。もしそうなら、包み隠すという衣装の意図に反することになるだろう。

仕事着のスカートの内側には、マールドルフの女性たちは年齢には関わりなく、普段の日も祭りの日も、柔らかな厚手木綿布の明るい紅色のスカートを着けている。普段着は装飾が無いことが多く、稀に細い緑のウールのリボンを裾に一周させる程度である。この紅い下着は、着けている女性の動きに合わせて見え隠れし、どの仕事着にも欠かせない董色のウールの靴下を囲んでひらひらするのが絵のようである。

なお仕事のときの靴について言えば、マールドルフの女性たちが履くのは、平たい《普段靴》(Kommmodschuh) だけで、ブーツも編み上げ半ブーツも使わない。彼女たちは、ぬかるんだ地面でも、色靴下をよごさずに器用に動き回る。この《普段靴》は靴職人につくってもらうしかない。これを作るには、靴職人は固い牛革を選び、また踵部には鋳を打つことが多い。幅の広い牛革には、ピッチを沁み込ませた太い亜麻糸で縁が縫いつけられる。

フォーゲルベルクの山から冷たい風が吹き下ろすようになると、マールドルフの女性たちは、小さな房がついたウールのスカーフで頭をしっかりと包む。凝った作りのワッフル型に由来する《ワッフル》布の豊かな色彩は、着ける女性たちの年齢・立場、それに喪中と半喪中の如何によって違いの幅がある。悪天候ではモツツェを脱がず、編んだネッカチーフを内側に押し込む。そうしたネッカチーフは使い古したもので、丹念に刺繍をほどこした晴れ着のネッカチーフに較べるとあっさりしている。しかし色調を喜ぶ若い娘の感性は減退してはいない。たしかに平編みや鉤編みの花輪文様こそあきらめてはいるが、色を取り混ぜ、同じ色でも調子を変えて編んだ巾広い縁取りが鉤編みでほどこされ、それが撚り糸によって際立つ四隅を囲んでいる。畑で突然大雨に見舞われたときなど、女性たちは、外側のスカートを捲って頸と頭を覆う。丈夫な《葦毛の馬》は雨を通さないのである。すると色鮮やかな、たいい紅色の裏地が女性の顔を包む。同時に下に着けていたリボン付きのスカートが見えてしまうのは気にならないようである。事実、教会堂へ詣でる途中、あるいは町へ出かける道中でも、マールドルフの女性たちはそうした対処をする。それが習慣であった老婦人の場合は雨傘を携えない人がほとんどだが、今日では、大きな傘を持たないマールドルフ女性は考えられなくなっている(写真48)。

夏が盛りになるにつれて、仕事着は軽いものになってゆく。人々はモツツェを脱ぎ、黒い編み物のネッカチーフに替えて、洗いの効く軽いコットン地になる。紅やブルーあるいはグリーンで、花柄あるいは水玉模様が付いている。暖かい日にはショールを顎の下ではなく顎のところで結わえるのも一般的である。ネッカチーフとショールが軽く安価な素材であるのと同じく、夏の仕事着はたいてい木綿である。色は通常明るいグリーンで(カラー図版3)、ブルーやあるいはライトグレーは少ない。作り方は、多い布地のスカートの場合と同様である。またここでも、スカートの色に対して鮮やかな色合いの縞子のリボンが際立っている。ボディス〔訳注〕Leibchen 婦人用のチョッキで Mieder とほぼ同じ)は身体にぴったり合い、胸部をボタンで留める仕様として夏の上着の内側になるが、これまた同じ木綿地で作られることが多い。装飾では、ネックのスリットと袖口のスリットに色の付いた絹糸の結び紐、それに上半身の胸に合わせて二条のそれぞれ6個のガラス釦が軽い弓なりに並んでいる(後出v)。かく、夏用の着衣は軽めにできているが、それにも拘わらずヒップパッドは欠かせない。もっとも、重い布地のスカートに合わせるようなものではなく、繊維屑の詰め物も張りつめるほどではない。木綿やコットンの軽い夏物布地がマールドルフへ入ったのは、ようやくこの十年ほどのことで、少しずつ定着した。近隣のプロテスタントの村々ではかなり前から軽くて洗いがよく布地が人気となっていたのである。しかしマールドルフは、近隣諸村の衣装の布地と色合いの多彩さ(後出w)をそのまま取り入れたのではなく、既存の形態と色彩規則に新たな素材を生かしたのだった。年配の女性たちは、今もそうした新規な行き方には反発を示す。《暑い夏でも、昔は、スカートやショールで死ぬことはなかった》と彼女たちは言って、《新しい流行》に顔をそむける。

(牧草刈りの衣装と穀類収穫時の衣装)

夏場の作業の頂点は、牧草と穀類の収穫である。聖アントニウスの日(6月13日〔訳注〕フランススコ会初期のパドヴァのアントニウス〔1193頃-1231〕を指す)前後に牧草は刈り取りに適したくらいになっている。すでに日の出前から、刈り取り機の轟音が村の通りに響いている。機械を持たない人々は、大鎌を肩にかついでオーム低地に向かうと、一面に広がる牧草はちょうど花盛りである。夜露が乾くか乾かないかくらいの時刻に、刈り取り姿の女性たちが豊かな彩りの草刈りの大鎌を携えて現れ、草刈り人たちに朝食を配る。この牧草の収穫の日々には独特の気分が漂っている(カラー図3)。早朝から、また日中は暑熱という仕事の辛さも、この時節の爆発する喜びの陰に隠れてしまう。すでに何週間も前から、刈り取り仕事への準備がたまっている。若い娘は誰でも、それどころか既婚の女性も、牧草刈りには何か新しい一品を用意したがる。ボディスでも、色染めした木綿地のスカートでもよい。二人、三人と連れ立って牧草地へ出かけ、途中で他の刈り取り女性と出会うと、互いに相手を見て

値踏みし、ささいなものにせよ自分の衣装が新しさをそなえていることに誇りをかみしめる。また衣装を見ただけで、女性たちのグループがどの仕事へ行くのかが分かる。ジャガイモをかき集めたり、苗を植え付けたりするには、一番簡単な仕事でよい。それに比べて牧草の刈り取りには、亜麻に捺染の前掛けがもとめられる。普段は、日曜の午後や町へ出かける時の一品で、十字模様をあしらった小ぶりの縁取り、あるいは刺し子縫い（キルティング）がほどこされる。男女とも、白いシャツの袖がまばゆいほどである（カラー図版3）。皆、ジャケットは脱いでいる。若い娘たちは好んで紅いコットンのネッカチーフ、それに同じ色のスカーフを着ける。それに混じって白いスカーフも見える。黒っぽい布地に青と白の模様（いわゆる*焼きもの模様）を散らしたのは年配の女性たちである。牧草刈り取りの女性たちのなかには軽い木綿地のスカートを着けない者もいるが、それは牧草衣装の一般的な決まりに従った、もっと上等の日曜のグレーの混紡のスカートを着るためで、それにはライトブルーの幅広の《綿リボン帯》が付いている。年間の農作業において、日曜の晴れ着に近い衣装が見られるのはこの時だけである。軽い布地が衣装に浸透した十年前までは、そうした牧草衣装はもっとたくさん見受けられた。また今日では散見される程度だが、当時は若い娘の白い混紡のスカートもあり、それにはライトブルーのリボンが付いていた。それに、色物の縞子のボディスと白のスカーフという取り合わせである。1900年頃にはまた大きな麦わら帽子があり、それによって娘や既婚女性の牧草刈り衣装は完成するのだった。麦藁帽はホムブルクの春の市で買ってきて、マールドルフではリボンを付けずに、牧草の刈り取りと穀類の刈り取りにかぶった。一方、ロースドルフでは麦藁帽子にブルーのリボンを巻き、端を頸の後ろに垂らしていた。

*《聖キリアンが刈り手をお呼び》、日曜日に畑の間を歩く黄金色の麥が揺れるようになると、そうマールドルフでは言われる。今日では刈り手が大鎌を使うことは稀である。どの農家も刈り取り機をもっている。刈り取りの男女とも、機械の後について、切り取られた麦穂を三日月鎌で拾い上げて穂束をつくってゆく。ほこりと汗の場所に牧草衣装を持ち込むわけにはゆかない。娘の既婚女性も着古した《栗毛の馬》を取り出して、それに粗い亜麻の前掛けをつける。下着の長い白い袖を汚さないために、暑さをこらえてモツツェを着込む。たいていは白い亜麻布の《麦のモツツェ》(Kornmotze)、すなわち《胴着》(Mieder)である(写真9)。ネックのスリットが深く腹部カバー無しはこの袖付きジャケットの断ち方は、概ね《ハンスペーター断ち》(本誌44号, p. 112)と同工である。この《胴着》は通常は上に羽織るが、それは袖付きの衣装の故である。ちなみに《胴着》の名称は、カトリック教会圏の衣装としてはこの種類のものにのみもちいられるが、(プロテスタント教会圏の)シュヴァルムの衣装の場合は、袖なしの下着の上に羽織る袖付き衣装を広く指している。シュヴァルム女性の夏の晴れ着では、この下着に近い衣類が華麗な一品にまで発展し、上腕部や肘には凝った透



8. 牧草の刈り取り：色の付いた軽い木綿地のやや上等の衣装を着る



9. 麥の刈り入れ：夏の暑熱にも拘わらず，刈り入れ作業の女性たちは硬い混紡のスカートと洗いのきく亜麻のジャケットを着る

かしを入れたりする(写真48)。マールドルフの《胴着》とシュヴァルム女性が夏場の畑仕事、殊に麦の収穫に着込む白い亜麻地のジャケットとの親近性が、もっとうかがえるものがある。農家で直接手掛けられる無着色の亜麻は、働く農民の衣類の材料としては最も古くからのものである。マールドルフの衣装では、男女の下着と刈り取り作業のさいの女性の《胴着》は今も幾らか使われる。しかしそうした《胴着》は無くなりつつある衣装の形態でもある。(第一次)大戦までは、マールドルフの農民たちの仕事着の場合、無染色のままの亜麻布は最も重要な衣装の素材であった。牧草の刈り取りや麦の刈り取りに着用されていた長い白色のズボンやジャケットがそうである。かつてはその衣装が、夏季の集団での作業に景観の一体性をあたえていた。今日では、先ず男性の衣装が消えたこともあって、一体性は気付き難くなった。しかし19世紀初めには、男性の亜麻布の衣装はまだ普通だったのである。ちなみに1818年の仕立て師の帳簿を見ると、農民の若者一人に対して4着の亜麻のズボンを記載している。その内3着は、それに合わせる亜麻のゲートルも一緒である。仕立て師は、これに加えて3着の《丸い》(runde) 亜麻の上っ張りも渡している(前出, p. 156)。また同じ年に、若者の父親は数着の短ズボンと長ズボン、さらに膝まで届く《四角い》上っ張りをも作らせた。なお《四角い》(eckig) とは、スリット無しの楕円状の裁断を指す。かく、一年でもかなり多くの亜麻布の衣装を作らせていることから推すと、男性は亜麻布の衣類を着るのは仕事のときだけでなかった。1830年のことだが、バウアーバッハ〔訳注〕マールドルフの近隣村)の教区司祭は、男性の白い上っ張りを教会堂にはふさわしくないとみなした。これに対してアマーネブルクの助任司祭^{デハンント}(〔訳注〕監督者である上級教会堂の高位者として村司祭より上位)の考えは違っており、教会官庁に文書を提出した。《当地にては白の上っ張りは、男性農民の国民衣装とも言うべきものです》。早くも1860年頃には、長い白の亜麻の上っ張りは男性衣装から消えていた。もっと値段の張る畝織り、羊毛、カシミアなどの布地が表に出てきて、亜麻の場合も、短い上っ張りのブルーの捺染が主流になっていった。

(パン焼き小屋)

農民の畑仕事の堅固な手順は*村落の最も元基的なゲマインシャフト経験に属している。衣装は、交替して推移するリズムと照応する。すなわち、集団でものを作る農民のその時々の主たる関心であるところのものを表わしている。ある時は牧草、ある時は麦の収穫、ある時は掘り起こしたジャガイモの掻き集め作業(写真11)。これらの仕事の空間的な共同性はよく取り上げられてきた。村の結びつきの共同性がそれ以上に強力に経験されるのは、ゲマインシャフトとそのものの一部としての仕事の間である。共同所有の仕事場の場、すなわちパン焼き小屋や村の晒し場(Dorfbleiche〔訳注〕洗濯場でもあるが漂白に重点)や《共同放牧地》(Gemeindehute)である。マールドルフの上ノ村(Oberdorf)と下ノ村(Unterdorf)はそれぞれパ



10. 麦束を立てる：襞の多いグレーの作業用スカートの裾には細い縞子の色リボン帯が付いている



11. 掘り出したジャガイモを取り集める：この作業に着古した衣装を使う

ン焼き小屋をもっている。前者は2基の窯を備えており、2基とも同時に使うのは祭りの日の前だけである。昼になると、アンジェルス鐘の合図に、翌日のパンを焼こうとする女性たちがパン焼き小屋の前に集まり、そこには村の雇人もいる。そして《プレイ》(gespillt)になる。すなわち籤引きで焼く順番を決める(写真47)。それに先立って、二人、三人と、一つの窯を一緒に使うグループができている。近所どうしのことも多い。しかし組み合わせは絶えず変わり、決まった規則で固定してはいない。これとは違ったゲマインシャフトの枠として、パン酵母を採捕する伝統的なシステムがある。隣人どうしの中の数家族が《パン種をもらう》。これは、パンを焼き終わった後、取りおいたこねたパンの一壺を持ち帰り、隣人グループにあるどの家にも使わせることを指す。マールドルフの女性たちは、どこでパン酵母が必要になるかを知っており、自分がパンを焼くために用意する。決まった家々で壺はいっぱい保たれている。パン酵母を取り出した者は、自分がパンを焼いた後、壺をいっぱいにして返すのが義務である。この互助の規則は村の慣行として強固である。共同パン焼き小屋で毎度焼いている小さなグループは、伝統的なこの形式を介してまとまりを保つ。誰もが、



12. 村の共用のパン焼き小屋：毎日、数人ずつ組になって交替にパンを焼く。祭りの前の数日はクッキーだけと決められている

パンの塊の数に応じて櫛の長い薪を持参する。一人だけは火を熾す役目である。他の者たちは、棹を取り出して、家に残っている人々に、窯の具合と、そろそろパンを塊にしなければならぬ頃合いを知らせに行く。こねた塊をパン焼き小屋へ運ぶ(写真12)前に怠ってはいけないのは、清潔な前掛けを用意することである。さもなければ、家のなかでの仕事着を着たままになってしまう。こねたパンを窯に押し込むときには、仲間の全員がパン焼き小屋に集まっている。窯の小さな開口部では藁が燃え、その炎の輝きを受けて女性たち(娘も既婚女性も)が薪の山に腰を下ろしている。窯の中ではパンが焼き上がってゆく。女性たちは村の新しいできごとを種にお喋りをしながら、戸口の外の往来で人の行き来を見ている。そしてすでに薪を引きずってきている次のパン焼きグループに、窯の様子を知らせる。最後に、互いに助け合いながら、パンの載った長く重い板を《クッション》(Ritzel [訳注] 頭上運搬の緩衝枕)に載せる。こうして重いパンの列は女性たちの頭に載せられて往来を通過してゆく。最後に、これからパンを焼き始めるグループに向けて挨拶の決まり文句を口にする。《すばらしいパンに焼いてね》。このグループごとのパン焼きが何日か続き、特別の密度へと高まりながら大きな祭りの日々を迎えることになる。この共同作業と交替にあって、自明そのもの



13. 大洗濯日：収穫作業の合間に、農婦は下婢と共に数日かけて洗濯に精を出す

なのが衣装のまとまりである。しかし注意深い観察者なら、共同作業の色彩にはたらいっているのは美的な現象だけではない、と気づくだろう。そして、グループを鼓舞している合理的にはとらえきれない深部の感情価値を感じとるだろう。

(布地の晒し場)

同じことは、小川のほとりの広い布地晒し場 (Bleiche)¹³⁾での共同性にも言える (写真14)。大戦前までは、夏の始めの数か月、ここには《反物》(Steige 語義は小径)と呼ばれる20エルレ (= 11.40m)にも及ぶ大きな亜麻布が広げられた。自家で育てた亜麻を織子に織らせたのである。この《ぬの》(Duch)は4週間にわたって晒す必要があった。娘たちは、如雨露を手に終日そこへ行き来した。何枚の反物があるのか、仕上がった亜麻布は花嫁道具として長持ちに収めるのか、それとも下着やベッドシートを作るためのものか、を誰もが頭に入れておかねばならなかった。日が暮れても、なお如雨露での水掛けに相当の時間を要した。その後、若い男女は輪になって歌をうたった。亜麻栽培が衰微すると共に、夏場の布晒しの楽しみも無くなった。それでも1934年には、わずかに隣どうしの3人だけが12枚の反物を晒す作業をしていた。晒し作業の時節が終わる日は特別で、それを映した一枚の写真は、仕上がった亜麻布をとりまとめる喜びを伝えている (写真15)。若い娘たちは、準晴れ着で晒し場へやってきた。リボン装飾付きの《跳ね織り》、あかるい捺染の前掛けである。朝食は常よりも豪華だった。晒し場ではたらく洗濯の女性たちに、人々は持参の果実酒をふるまった。反物が乾き、折りたたまれ、《叩き棒》([訳注] 羽子板かラケットのような形の板)を使い終わると、用意した籠に入れて紅いリボンを掛けた。若いマールドルフ女性たちがしががって宝物を《クッション》を挟んで頭に載せて村の大路を歩むと、通りかかった村人が呼びかけた。《これで嫁に行けるぞ!》—娘たちは、誇らしげに微笑んだ。

夏には毎日、小川のほとりの共有牧草地には洗濯物がならんだ。早朝暗い内からマールドルフの女性たちがそこへ運んだのである。いつも新しいグループができており、上ノ村や下ノ村のどちらかでまとまっていた。農民女性は下婢を連れて、大量の重い洗濯物を手押し車に積んでやってくる。洗濯の日取りは収穫作業次第であった。農民女性(正農)の場合は、早ければ8週から10週ごとに洗濯日となった。屋敷からでる洗濯物の量はとてつもなく多いからである。《貧しい人々》の場合はもっと頻繁に洗濯しなければならなかった。農民(正農)のように、いつまでも貯めておけるほど多くの下着をもっていなかったからである。そうした社会的な差異にも拘わらず、下着類は驚くばかりに統一性をもっていた。女性と子供

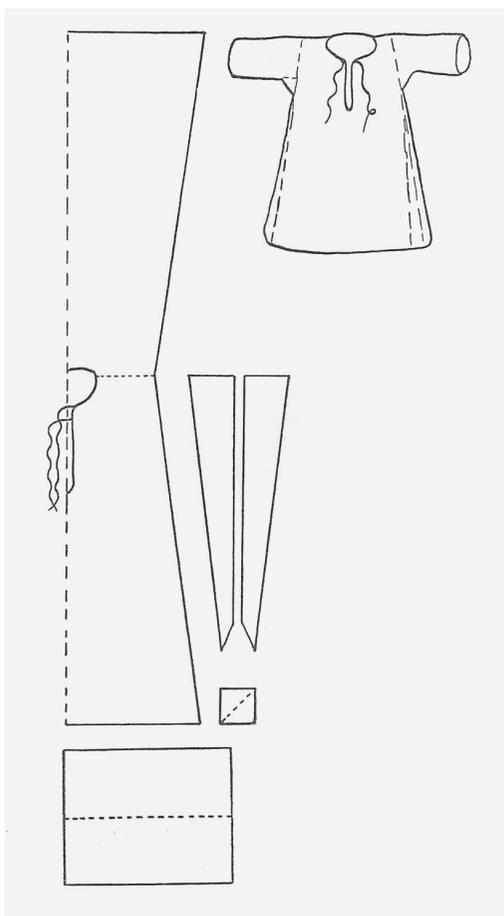
13) 参照, M. BRINGEMEIER, *Gemeinschaft und Volkslied* (1931前掲注5), S. 83.



14. 村の布地晒し場：夏には、小川のほとりの布地晒し場で水と日光による漂白にいそしむ



15. 村の布地晒し場：自家栽培の亜麻糸を村の織り手に出してできた《反物》を晒す、今日ではほとんど見られなくなった



女性のシャツの断ち方

には、こわい亜麻布の幅をとって仕立てたシャツで、ゆったりした長い袖と首周りの紐が付いている（参照，p. 166）。ネックのスリット部には、クロスステッチで二条の生命樹があしらわれ、それに挟まれて刺繍による着る人の名前が紅く輝いている。男性のシャツの場合は、女性用と同じく自家製の亜麻で作ったものの他に、町で買った下着用の布地も混じっている。ベッドシートは、片面は白いラミー織り（Nessel 木綿地の硬めの平織り）、あるいは漂泊した亜麻布、表側は色染めしたコットンである。他には、ベッドシートの二倍のサイズの《カーテン布》が数点加わる。二枚の亜麻布が触れる部分には、縦線に沿って鉤織りの縁が付き、そこには鳥あるいは花の模様が装飾に入っている。真ん中あたりにはクロスステッチでハート形もしくは生命樹に挟まれて持ち主の女性の名前と年次が表わされている。その《カーテン布》をベッドに掛けて、それが居間のインテリアになる。布の半分は羽毛布団の

下に広がっているが、もう半分は床まで垂れており、そのためベッドの横線は布地の鉤編みに隠れている。時には《都会風の》下着が広げられることがあるが、それらはマールドルフの洗濯物のあいだでひと際めだつ。マールドルフの若い女性たちは、それらに好奇心を示す。が、年配の女性たちは、あんなものは長続きしない、と断言する。

(村有地での鶯鳥の飼育)

村の共有の晒し場から遠くを見ると、夏の始めには、若い娘たちが草地で鶯鳥を追っている(写真16)。鶯鳥が大きくなると、鶯鳥飼育の人たちに管理を任せられることができる。が、それまでの世話は、少女たちの仕事である。家族の子供たち全員の布団にたっぷり羽毛を詰めるくらいにまでなると、もはや鶯鳥を飼う必要はなくなる。鶯鳥を飼う役目の一団は、毎日々々、村有の草原にあつまると、日曜の午後も例外ではない。その時間を紛らしてくれるのは歌とお喋りである。とりわけ若い男たちが娘たちのもとへやってくる時がそうである。やがて秋になると、村有の草原は《貧しい人々》が《機械を使う》場所になる。これは、彼らが互いに協力して助け合いながら脱穀機を動かすことを指す。他方、農民(正農)は自分の



16. 村の共用の草原：鶯鳥は布団の羽毛をとるため、鶯鳥の世話は少女たちの仕事

脱穀場をもっている。脱穀には何日もかかるのである。村有の草原では、牧草の二番刈りが済むと、《まずしい人々》の山羊が鳴き声を立てるようになる。

(週日の衣装と日曜の衣装)

農民の規則思念は、働く昼間と休息・くつろぎの夜というはっきりした区分をもっている。またマールドルフの土曜の午後は特別の色合いを見せる。たいていんてこ舞いの刈り取りの週であっても、早めに仕事仕舞いになる。村は日曜前夜の気分である。屋敷の面々は畑から早々に帰館する。パン焼き小屋ではクッキーを焼く。通りを掃く者もいる。屋敷の大きな階段を磨くのは成人・少女を問わず女性の持ち分である。子供たちは庭で花を摘んで花輪をつくって教会堂を飾るのにもってゆく。教会堂への道で若い娘も成人の男女も顔を合わせるの、週日の教会衣装で告解に赴くのである。隣人どうしの若い女性たちは、明日は何を着てゆくのか尋ね合う。夜には、早くも衣装棚から《教会堂行き》を取り出して用意する。早朝ミサへ参集するときはなおさらである。夜が明け染めると、日曜の鐘が鳴る。誰もが、鐘の音を理解し、村の日曜の共同性のなかに高揚しつつ入ってゆく。安息日としての農民の日曜は、屋敷の仕事も既舎の手入れも、必要最低限にまで限定されており、それによって宗教的・教会的な性格が前面に現れる。週日の衣装と日曜の衣装の厳格な区分、晴れ着に等級があることもそこから解することができる(後出x)。時として、仕事日である週日が、マールブルクあるいはキルヒハインへ出かけることで中断される。もっともそうした遠出が、純然たる楽しみのためであることはあり得ない。たいてい、必要に迫られての買い物あるいは病院へのお見舞いが中心である。そうしたときのマールドルフの女性たちの装いは目を瞠らせる。成人女性は、たいていは、ブルーの《綿リボン帯》が付いたグレーの混紡スカート、若い女性たちは晴れ着としては上から二番目の《跳ね織り》のことが非常に多い。しかし誰もが知っているのは、黒く編んだ《縫い付けモツツェ》のクロスステッチの縁取りのあるものであり、それに加えて明るい捺染の亜麻布の洗いのきく前掛けであった。こうした場合には繻子のモツツェを着ることはなく、まして《チベットのエプロン》(Dibettschürze カシミア風のウール地)となればなおさらであった。《教会堂行きの装い》は、町へ出かけるときに身に着けるものより、はるかに《高級》だったのである。

(キルメス [秋祭り])

マールドルフの人々の唯一の世俗の祭りに、キルメスがある。聖ミヒアエルの日の後の日曜に催される。由来と推移には教会色が強い。服飾の教会規定では、一級祝日とされている(後出y)。キルメス初日には厳かにミサが執り行われ、聖体行列が組まれる。二日目は、墓地への巡礼で始まる。農民の暦の感覚では、キルメスは、週の推移に区切りを設ける上での

確かな節目である。マールドルフの人々にとっては、この期日までにジャガイモの収穫をすませていなければならない。また甜菜を納屋にしまい始めるのは、これ以後である。居間、台所、家屋の外壁も新らたな節目らしくされる。しかしマールドルフのこの祝いは、近隣の村々のいずれとも共有されてはいない。正にマールドルフの節目なのである。既婚者は、若いときの友情や愛の思い出で胸がいっぱいになる。若い娘たちは、すでに復活節のときからキルメスのダンスのことを考えている。つまり、若い男に贈るイースターエッグにこんなことを書いたりする。

あなたのためにつくった卵

だから今度のキルメス一人ぼっちにさせないで

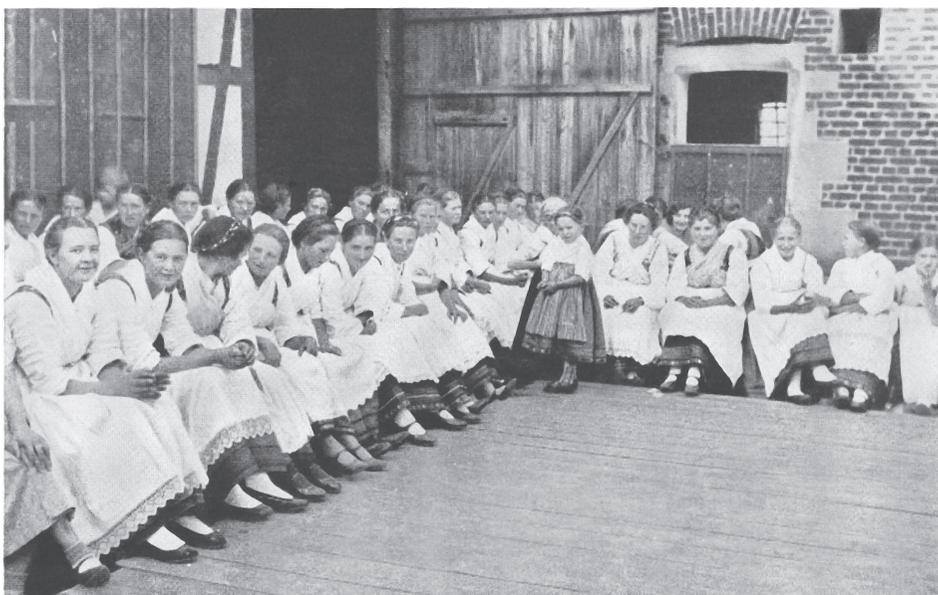
家族は、キルメスの何週間も前から、近隣の村々の親戚に招待を送っている。祭りの前に、娘たちは、村有の草原を流れる小川で白い木綿の靴下を洗う。キルメスにダンスをする一番年若い娘たちは、仕立て師と相談する。他の者たちは、バチストないしは洗濯のきく絹地で夏物の軽いスカーフを手作りすることが非常に多い。50、60年前までは、マールドルフの娘たちの間には、婚約者にキルメスの布を贈るという習わしが残っていた。金色や銀色にきらきら光る糸でハート型を刺繍して、そのなかに男性の名前を入れるのである。そしてキルメスのダンスとなると、今度は男性が紅く染めたコットンの布地で端に刺繍をほどこしたものを贈るか、あるいはそれをズボンのポケットから長く外へ垂らすかする。娘の方が、婚約者のために刺繍入りのズボン吊りを作ることも多かった。色彩ゆたかな花々のモチーフとハート型文様に挟まれて、ズボン吊りの胸に上に来る横帯に男性の名前が見えるようにとの工夫である。キルメスのダンスでは、今も、この《古風な》一品を見かけることがある。踊り手の若者の亜麻布のシャツが白いだけに、色鮮やかなズボン吊りはひととき目立ち、娘の衣装と重なって、いかにも農民的な調和を醸し出す。男性衣装が、村落共同体の祭りの意味深さを教えてくれるとすれば、この組み合わせを措いて他にはないだろう。

若い娘の衣装の方は、キルメスの日それぞれで独自のダンス衣装を繰り広げる。キルメスの日曜、午後の禱りが済むと、楽隊が村の通りを行進し、ダンスの曲を演奏する。娘たちは、教会堂から帰るや、急いで衣装棚の前でキルメスの装いに着替えをする(カラー図版4)。最初は、白のレースをあしらった色鮮やかなキルメスのブラウス(Kirmeshemd)である。ブラウスには、都会風の亜麻布刺繍がすでにちらほら見える。袖の上から下までの《丸粒》(dottich)、すなわち乳首(Dutten)状の丸い小さな襷で埋めるのは《時代遅れ》である。キルメスにあたって特にボディスを慎重に選ぶ。それは、ダンスにはモツツェを着けず、そのため装飾は挙げてボディスがになうからである。紅やライトブルー、あるいはグリーンフェ

ルト地で、袖のスリットの周りには彩り鮮やかな幅広の絹のリボン帯が載っている。スカートは、通常は外に付けるスカートを内側に着込むが、そこにはリボン帯がたっぷりあしらわれ、紅い当て布が見える。多いのは、ブルーのリボン帯の白い混紡地スカート、もしくは赤みがかった《跳ね織り》に緑のリボン帯をつけたスカートである。さらにキルメスの日曜には(写真17)、グリーンの厚手木綿布スカートに幅広い紅の絹リボン帯〔訳注〕この場合はスカートの上から裾までの縦に走る装飾リボン帯)で、この《蛇のうねり》(Schlangenzüge)と点状刺繍にはビーズを縫い付けた縁取りまで加わることもある。スカートの裾の縁取りにぴったりくっつけて紅と緑の幅の狭い絹のリボン帯が走っている。十月の空模様が怪しくなると、マールドルフの娘たちは、キルメスを華やかにするために、ウール糸で編んだ自分のもつ最も美しい《縫い付け》スカーフを頸に巻く。この日は、娘にとっては、貴重な花模様刺繍を見せるときであり、手藝の技を存分に披露する場でもある。また《縫い付け》スカーフに合うのは、絹あるいは《チベット地》の色物の前掛けで、金銀糸の刺繍と名前が入る。そしてこの色合いと最も調和するのはボディスの色である。さらに衣装に見合ったウールの靴下はブルーに白の菱形文様である。足元は、フェルトあるいはシュトラミン(Stramin〔訳注〕刺繍のキャンパスになる粗布)で作られた平たい《普段靴》だが、現代のストラップシューズも入ってきている。その点では、白もしくは薔薇色の軽いパチストのスカーフも伝統衣装の衰頹の象徴と見ることができ、他の衣装が重い素材に手の込んだ装飾が施されるのに対して、この安価な軽い布で刺繍も欠けているという組み合わせにギャップがある。この白い布地に合うとすれば、白の前掛けであろう。暑い夏、殊に*エアフルツハウゼン〔訳注〕マールドルフに南接するカトリック系の村)の《サクランボのキルメス(サクランボ祭り)》(7月初め)には、この軽いダンス衣装が活躍する。とまれ、野外でのダンスになる。飲食館の広い中庭である。子供たちと既婚者は、向かい側の高台からその様子を見ている(写真17)。中庭の二面にはベンチが据えられて、娘たちがぎゅうぎゅう詰めで坐っている(写真18)。衣装がお揃いなのは、娘たちがまとまりとなっていることをありありと示している。17歳から25歳の集団で、年齢には明白な区分がある。それに向かい合って、同じ年齢の男たちがやはり集団をつくっている。ダンスの音楽の最初の一音が響くや、若者たちはそれぞれ踊りの相手を選び、ダンスが終わると娘たちは元の場所へもどる。若者が同じ娘と数回踊ると、男が注文して、娘のところへボーイにレモネードを一杯運ばせるのが習わしである。しかしダンスが休憩になっても、若者と娘たちはそれぞれグループに分かれたままである。屋内の広間で催されるマールドルフのキルメスでも、それは同じである。紅いリボン帯のついたグリーンの上スカートの音楽に合わせてリズムカルに揺れ、輝くばかりの紅いスカートの左側の当て布が白もしくは色物の靴下を軸に回転するのは、めったにない喜びの光景である。《燃え上がる》ようであれば、とマールドルフの娘たちは言う。これは、ゆっくりした足取りでは隠れて



17. キルメス（秋祭り）の日曜：キルメス一日目のダンスのスカートは緑、編み物のネッカチーフにまじって、パチスト地に彩りゆたかな刺繍のネッカチーフが見えるのは《都会風》



18. キルメスの月曜（ダンスの合間の休憩）：キルメス二日目のダンスでは明るい紅色のスカートに、レースの入った白い前掛けと、パチスト地のネッカチーフ

いるスカートに紅い当て布が、ダンスと共にはじけるように輝くようになるのを狙っている。紅は、若者のダンスの楽しみの色と受けとめられる。

間断なき真紅は、キルメス二日目、月曜にみなぎる色でもある。墓地への厳肅な雰囲気巡礼で始まるが、朝食の後、音楽隊が村の通りざま、窓から顔を出す娘たちに誘いをかけ、早くもキルメスの気分に戻っている。正に祭り一色で、誰も畑へ行かない。午後3時には、またもや音楽隊が村の通りを進み、いよいよダンスが始まる。娘たちは、それぞれ集団をつくってダンスの会場へ出かける。誰もが、真紅の厚手木綿布で仕立てた装飾のにぎやかな《キルメス・スカート》である。そこには緑の絹のリボン帯が付き、縁にはたいてい一条のパール飾りが光っている。この紅色のスカートは、キルメスの月曜にダンスに行くときだけである（カラー図版4）。近年では、収穫感謝祭のダンスでも見られるようになっており、そこから知られるようにキルメスに限定されているわけではない。歴史的に見ると、紅色のスカートは内側の衣類に属している。マールドルフの女性たちは年齢にかかわらず、今も、内側の紅色のスカートを着けている。ダンスの時にモツツェと外側のスカートを脱ぐ習慣から、この内穿き衣装はとりわけ祭りらしいものになっていった。当初は簡素であったが、時と共に装飾の度合いがたかまったのである。そうした推移はかなり遡るとみなければならない。近隣のプロテスタント系の村々でも、10年前までは同じような紅色のキルメス・スカートが残っていたからである。ちなみに、マールドルフの老婦人が時折口ずさむ、ほとんど忘れられた歌がある。

レッツァーバッハのキルメスで
 カトリネ伯母さん訪ねると
 従弟のウンケルバッハさん
 ビオロン弾いて [欠失]
 母さん紅いスカートを
 父さん山羊からネクタイを

[訳注] 歌の断片で意味は不完全だが、スカート (Rock) と山羊 (Bock) は韻を踏んでいる

レッツァーバッハは、マールドルフの古い一劃である。昔は、紅いスカートは既婚女性のキルメス装束でもあったと考えられ、またそれ以外では、絹のネックチーフの硬めの端を飛び出させるのは男性の装飾であった。なおマールドルフ娘たちの紅いスカートとの取り合わせでは、色物のフェルトのボディストと、白く軽いネックチーフ、それに縺子の刺し子をあしらった白い亜麻の前掛け、そして白の木綿の靴下である（カラー図版4）。また紅いスカートに色物の前掛け、刺繍を入れたウールのネックチーフというのが散見される。ダンスの波間



19. キルメスの月曜：この日の村の若い男女のダンスには「ウェストに手を添えて」の他、伝統的なダンスの種類が組まれている

に現れる真紅の輝きは一日では終わらない。キルメスの二日目の色彩規則でもあり、若い娘たちの誰もがこれに服している。ただ26歳を超えてもダンスへ行く娘には、紅のスカートは若作りと思えるらしい。それを反映するのが、キルメス一日目のダンスにおける緑のスカートである。またスカートに値段の張るリボン帯を付けているのは富裕な農民の娘であろう。しかし彼女は、父親の屋敷あるいは隣屋敷の家僕とも踊る。同じく屋敷の後継ぎも、自家あるいは隣家の下婢をもダンスのカップルへ誘う。好まれる曲種は、ワルツ、*ドレーヤー、スコットランド舞曲である。キルメス二日目には昔のダンスが入ってくる。特にエアフルツハウゼンでは伝承的なダンスが忠実にまもられている。マールドルフの若者たちもそこでドレーヤーを踊る。四分の二拍子に合わせて《ウェストに手を添えて》と4回歌ったところで、踊り手二人は向き合い、タクトをとって互いの肩をたたき、掌を打ち、そしてウェストに手を回す(写真19)。マールドルフでもこのダンスは入っている。が、もっと多いのはやはり*「ほら御覧、向こうにあの人やってくる」(〔訳注〕新しいダンス曲で今も人気がある)で、カップルはダンスのステップで前へ進み、後ろへ下がる。そしてスコットランド舞曲で締めくくられる。ダンスの合間に、若者たちのグループが歌をうたい始めることがある。娘たちもそれに続き、さらに老人たちにつながってゆく。衣装と同じく、村の祭り共同体であり、ここではそれが最高度に全一性の経験となる。屢々起きる隣村の若者たちとの殴り合いや、村の外から来た娘をみつけて目を丸くする(後出z)といったことも、この観点から解する

必要があるだろう。

訳注

- p. 150 跳ね織り (Sprinkel) 亜麻糸と羊毛糸を組み合わせた織り方で、捺染による文様には花柄などの小紋が多い。
- p. 150 綿りボン帯 (Floretbaand) 繊維の種類としてよく耳にするのは紡錘時の生糸の屑・真綿を指す Floretseide, Flockseide, Filoselle, Strazze (frz. fleuret; engl. floret-silk, ferret) であるが、ここは木綿の屑を指すため《綿 (わた)》と訳した。なお縁取り状に縫いつけているため《リボン帯》と訳す。
- p. 151 慈悲の修道女会 (Barmherzige Schwestern) フランスの司祭で没後1737年に列聖されたヴァンサン・ド・ポールまたはピンセンシオ・ア・パウロ (仏 Vincent de Paul 羅 Vincentius a Paulo 1581-1660) にちなむ女子修道会。バイエルン国王ルートヴィヒ 1世によって1832年にドイツ語圏に導入された。
- p. 151 『神の町』 (*Stadt Gottes*) 1875年に司祭ヤンセンによって創刊されたカトリック女性のためのイラスト誌、2020年に『今日の暮らし』 (*Leben jetzt*) のタイトルに変わった。アルノルト・ヤンセン (Arnold Janssen 1837-1909) は低地ライン地方ゴッホ (Goch) に生まれ、オランダのシュタイル (Steyl/Venlo 現在はヴェンロ市域) に没した司祭・宣教師で、1875年にオランダのシュタイルにおいて大天使聖ミカエル神学校、および修道会「神言会」 (*Gesellschaft des Göttlichen Wortes [Societas Verbi Divini]*) を設立した。また1889年に「聖霊奉侍布教修道女会」 (*Dienerinnen des heiligen Geistes [Servae Spiritus Sancti, SSpS]*) を、1896年に「永久礼拝聖霊奉侍修道女会」 (*Dienerinnen des heiligen Geistes von der ewigen Anbetugn [Servae Spiritus Sancti de Adoratione perpetua, SSpSAP]*) を設立した。アルゼンチンと中国への布教に重点を置いた。神言会は日本では南山大学の設立母体である。1975年に教皇ヨハネ・パウロ 2世によって列聖された。
- p. 151 『モーニカ：カトリックの母親と女性のための雑誌』 (*Monika. Zeitschrift für katholische Mütter und Hausfrauen*) カトリック系の出版人ルートヴィヒ・アウアーによって1869年に創刊され、当初は週刊誌であったが、後に月刊誌となった。出版社は数回変わりながら2000年まで刊行された。ルートヴィヒ・アウアー (Ludwig Auer 1839-1914) はバイエルン王国オーバープファルツのラーバー (Laaber Kr. Regensburg BY) に生まれ、バイエルン=シュヴァーベンのドナウヴェルト (Donauwörth BY) に没したカトリック系の文筆家・教育家・出版人。1867年に「カトリック教育学組合」 (*Katholisch-pädagogische Verein in Bayern*, 1872年に改称されて *Katholischer Erziehungsverein in Bayern*) を設立し、「カトリック学校新聞」 (*Katholische Schulzeitung*) を発刊し、2年後に女性向けの雑誌として本誌を創刊し、当初のタイトルは「モーニカ：家庭教育改善のための週刊誌」 (*Monika. Wochenschrift zur Verbesserung der Familienerziehung*) であった。出版地は当初はドナウ河畔ノイブルク (Neuburg an der Donau) など一定しなかったが、1872年からはアウアー夫妻が転居したドナウヴェルトとなった。この時期のアウアーの文筆・出版活動には、プロイセン王国のビスマルクが進めるローマ・カトリック教会への牽制策 (それを批判したフィルヒョーによって1873年に《文化闘争》の名称)

- への対抗活動の一翼をになうとの自己認識があった。
- p. 152 シュリッツ地方 (Schlitzer Land) フルダの西隣地域, フォーゲル山地に属し, シュリッツ川流域で, 中心には小都市シュリッツがある。
- p. 153 菱形紋様を入れた靴下 (Zwickelstrümpfe) 靴下の側面にやや幅広く縦に菱形の連続文様を入れるのは広く行なわれている伝統。
- p. 157 聖ゲルトルートの日 (Gertrudentag 3月17日) ニヴェル (現在のベルギーの西辺の都市) のアウグスティノ修道女会の尼僧院長であったゲルトルート (Gertrud von Nivelles [Gertraud, Gertraudt, Gertrude, Geretrudis] 626-659) は, 病者の世話に加えて, 行旅の人々をいたわったとされ, 旅と街道の守護者としても崇敬される。
- p. 160 焼きもの模様 (porzelliner) 青と白は, 食卓の定番であるヴェスターヴァルトの水差しやジョッキの色調の故の呼称であろう。
- p. 160 《聖キリアンが刈り手をお呼び》(Sankt Kilian stellt Schnitter an) 聖者キリアン (Kilian [Kilianus] 640頃-689) はアイルランドに生まれ, ドイツのヴェルツブルクに殉教した布教者。支配者のキリスト教への改宗を試みる過程で同志と共に7月8日に殺されたとき, その遺体の上に建てられたのがヴェルツブルクのノイミュンスターのキリアン教会堂であるとされる。ブドウ栽培を教えたときとされ広く農民の守護者の一人となった。
- p. 162 村落の最も原基的なゲマインシャフト経験 (elementarste Gemeinschaftserlebnisse) 《ゲマインシャフト》の語法として, 村落など自生的な人間集団の同質性を強調したため, 後に批判されることになったのは学史の必然的推移だが, イデオロギー的な逸脱とまでは言えず, 時代状況から見て抑制が効いていた。
- p. 172 エアフルツハウゼンの《サクランボのキルメス》(Erfurtshäuser „Kirschkermes“) エアフルツハウゼンはマールドルフに南接し, 今日では両村ともアマーネブルク市域に含まれる。キルメスは, 元は教会堂開基祭, やがて秋祭りとなったが, 季節にかかわらず民衆的な祭りの意味でも使われる。
- p. 175 ドレーヤー (Dreher) オーストリアが主流だが, ドイツのフランケン地方でも発達したダンスの種類。3ステップとターンが基本のためこの名称があり, キルメスの男女のダンスの定番である。
- p. 175 「ほら御覧, 向こうにあの人やってくる」(Siehste net, do kimmt er) 1887年にジークムント・シュリヒティング (Siegmond Schlichting 1853-1924) によって作曲, シュマルゾー (A. Schmarsow 不詳) の歌詞で発表されたダンス曲で今日でもダンスの定番の一つ。曲種のクロイツポルカ (Kreuzpolka) はスコットランド風としてヨーロッパ各地で工夫された新たなポルカで, 19世紀のドイツで流行した。またこの曲を含む一聯の作品によって同年中にベルリンで流行し, たちまちドイツ語圏各地で歓迎された。シュリヒティングは今日はポーランドに属している同国西辺のピューリッツの近くで生まれ, バルト海沿岸のシュテッティンに没した。永くシュテッティンに居住し。会社員勤めの傍ら独学で作曲を手がけた。